

『古今和歌集』教材論

——季節觀念の享受という視点から——

中 村 佳 文

一、序——古典和歌教材の問題点

古典教育を考えたとき、和歌は必須の教材であるということに異論はないであろう。『百人一首』に代表されるような秀歌撰の存在が、和歌一首一首への親しみをもたらし、音読・暗誦する文化の一端を担ってきたことから知られるように、中世以来の歌学の伝統に支えられながら、長い間、享受され親しまれてきたのが和歌である。しかしながら、昨今、和歌教材が古典教育の中で占める位置は、決して大きいとは言いがたいのが現実であろう。勿論、個々の教育現場に於いて差はあるが、むしろ付属的な存在に下落してしまつてはいないだろうか。こんな疑問に発し、古典和歌教材における問題の所在を、明確にしておくことにする。

中学校・高等学校の教科書を概観すると、古典和歌は、「三大歌集」という括りで、いわば「万葉・古今・新古今」として教材化されているのが一般的である。和歌史に従えば、これも必然な

流れと言うこともできるだろうが、「三大」としたときに、三者の「歌風比較」という視点が伴うのも必然である。いうなれば、教材として「文学史的視点」と「比較読み」という二つの価値を同時に含み込んだ教材である。

しかし、その教材価値を活かす際に、配慮が十分でない為に生じる弊害もある。一つに「文学史」的な研究の中で言及されてきた歌風の特徴が「先にありき」で、概念による支配的な教え込みに繋がってしまう危険性である。教材本文を読んだ上で、「この和歌の歌風は」と考えるのではなく、先入観として規定された歌風の特徴に向かつて、和歌を読もうとする傾向が生じるといふことである。

とりわけ『古今集』の評価は、明治時代の正岡子規による酷評が著名であるが為に、子規の評価に何ら疑問も抱かないままに、『万葉』と比べて「くだらぬ集」という方向に向かった読み方が為されてしまうような場合もある。これらの問題は、和歌教材の

「読み」から自由を奪い、規定された枠の中で、受身的で問題意識の低い学習を助長するものである。『古今集』を教材としたとき、その和歌の魅力を十分に学習する為にも、広い視野で一首に向き合う必要性を感じるのである。

二つに、教材の配置という視点で中学・高校の教科書を概観すると、和歌教材は、中学三年生と高校一年生という連続した二年間の教科書に配置されている場合が多い。勿論、義務教育とその後という学校制度上では、なお別立てであり隔たりがあるという考え方もあろうが、現状の学校制度を見てみると、中高一貫教育を導入する学校が増加傾向にあることや、高校への進学率がほぼ全人に近い状況を考えると「連続二年間」の教材と考えることもできる。そこで「連続」の意義を十分に活かす教材化が為されているかを検証しておく必要があると思われる。

以上の二点を問題の所在として、本稿では日本で初の勅撰和歌集である『古今集』の教材論を展開していく。特に「季節観念の享受」という古典学習の目標を有効に実践するための提案を述べてみたいと思う。

二、古典和歌の教材化

「和歌は文学の基軸である。」といった文学論が過去に述べられてきたことがある。例えば丸谷才一氏の『日本文学史早わかり』では、「かつての日本文学はおびただしい数の詞華集を持つてゐたし、むしろ詞華集中心の文学であつた。」と述べ、明治末年からの「個人主義」により「詞華集のない文学」になってしまった

ことを指摘し、「日本の社会と文学との関係の移り変り」は、「詞華集」によって示されるものという前提で筆を起している。

この一例からも理解されるように、文学史的な研究や評論においては、「詞華集」を基軸とする見方がなされ、物語・日記・説話といったジャンルの峻別の中でも、明治期以前は「和歌」を中心に「日本古典文学」を考えるということが前提になるであろう。こうした立場を尊重すると、「和歌」ばかりを教材として扱うことは不可能であるとしても、少なくとも散文ジャンルを扱う際にも、常に「和歌」の存在を意識する必要性があると言えるのではないだろうか。

このような潮流が存在する中で、中学・高校を問わず教科書においては、文学史の中に点在したかのような「三大歌集」という教材提示が一般的である。序で述べたように「歌風比較」が、学習の大きな目標になっている。

それは時代の概観や文学史を見通す為の、鳥瞰的な視点を身につけるためには有効な目標にもなるが、その反面、個々の和歌の読解に、前提を設けることにもなる。『万葉集』は「素朴・雄大」、『古今集』は「繊細・理知」、『新古今集』は「幽玄・余情」といった大きな枠組の設定を、参考にはしたとしても、読解の最終的な目標にしてはならないと思うのである。それは個々の和歌が持つ表現の豊かさを、一つ概念に押し込めることになると同時に、享受側に批評的な読み方を許さない前提となってしまう危険性を孕んでいる。個々の和歌が持つ表現においては、文学史的な枠組みを超越するものもあるだろうし、他の詞華集との接点を

読み取れるものや、時代の状況に反して進歩的や懐古的な和歌が見られてもいはずである。

ここで全面的に文学史的な視点による学習を否定するつもりはないが、和歌が文学史の中に点在しているかのような呪縛からの解放無くして、古典和歌教材による活性化された授業実践はあり得ないのではないかと考えている。

次に、実際の教育現場における和歌教材の扱い方についての問題を考察してみよう。高等学校の基礎科目である「国語総合」を考えると、古典全体の教材の中で「和歌」の位置付けは、決して優先順位の高い方とは言えないのが実情ではないだろうか。勿論、各学校個々の事情に差異はあるが、「国語総合」の時間数自体が、四単位から多くて五単位というのが標準的かと思われる。その中で、「古典」分野の「古文」を扱う時間には限りがあると云わざるを得ない。そうした状況で、散文と韻文という比較になったとき、圧倒的に散文を選択する場合が多いように思われる。これも、個々の学校事情で、『百人一首』などを通じて、より積極的に「和歌」に注目する姿勢で学習に取り組む学校が無いわけではない。しかし一般的に考えて、やはり「古典和歌」軽視の傾向は否めないと思うのである。

逆に考えれば、散文においては是非とも基礎段階という思いが強く、なかなか据え置きにすべき散文が見あたらないとも言えよう。教科書教材の一例を挙げてみれば、説話による古文入門から始まり、『竹取』『伊勢』『徒然』『平家』『おくの細道』といった教材が、多くの教科書で定番教材となっているはずである。これ

に加えて「漢文」教材も学習せねばならないことも含めると、「古典和歌」は肩身の狭い存在ということになってしまっているだろう。場合によっては、単発で少量の時間で扱えることをいいことに、中途半端な時間数の調整用として効力を発揮してしまうという、皮肉な逆説を内包した教材として価値が見出されてしまう。しかしながら、基礎科目の定番教材として「古典和歌」は不可欠であるという認識から、教科書採録から外れることはほぼあり得ない。

そこで、改めてこの項の冒頭で触れた文学史的な視点に帰することにして、勅撰八代集以降も明治期に至るまで「和歌は文学の基軸である。」という立場を主張できるならば、古典散文の学習においても和歌の理解は不可欠と言うことになる。そこで提案として、古典散文を扱う際に、随時「和歌」との関連をもつて取り扱うという前提を設けておくべきことを主張したい。前述した散文教材に限定してみても、説話には『十訓抄』小式部内侍の「大江山いくの道の」に代表されるように和歌に関するものは多く、むしろその理解のために説話を利用すべきではないかとさえ思われる。中古の『竹取』『伊勢』は言うに及ばず、中世の『平家』にしても、合戦の場面描写において「平家」の赤旗が汀に多く散在している状況を、「龍田川のみみぢ葉を風の吹き散らしたるがごとし」(巻十一・能登殿最期)とした表現が見られる。これなどは、「古典和歌」の表現を理解していなければ、合戦が行われていた海の汀に、なぜ「龍田川」や「紅葉」が出てくるのかを理解することはできないだろう。そして近世の『おくの

細道」にしても、季節観に立脚した俳諧を理解するには、やはり「古典和歌」表現に習熟している必要があるのは言うまでもない。ここでは、文学史的な呪縛からの「古典和歌」教材の解放と、散文の学習においても随時、「和歌」教材を織り込んでいく学習方法の方向性を提案しておくことにする。

三、中高教材としての連繫

前項では、主に高等学校の教科書教材として「古典和歌」を考えたが、ここでは改めて中学校・高等学校の教材としての連繫を考えてみることにする。なぜなら、双方の教科書を見比べてみたときに、「古典和歌」教材は、中学校三年生と高等学校一年生という、学習者の立場からすれば二年連続で教科書に採録されている教材と言うことになる。そこで、まず最初に双方の教科書を同じ出版社で編集しているものに限定し、教材の採録状況を見ておくことにしたい。

三省堂・中学「国語」教科書『現代の国語3』では、「和歌の世界」という単元に、次の三首の『古今和歌集』歌を採録している。

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける（紀貫之）

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせし
まに（小野小町）

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にもおどろかれぬ
る（藤原敏之）

次に同じく三省堂・高等学校教科書『高等学校 国語総合 改訂版』では、前の三首と比較してみると、藤原敏行の「秋来ぬと」の歌に関しては重複しており、他の二首は類する和歌を採録している。紀貫之の「人はいさ」という春の「花」（勿論、この歌における「花」は「昔の香ににほひける」という点から「桜」の歌と解釈できないが）の歌に対しては、在原業平の「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」が採録されている。また「昔の香」という点に關しての類似を求めると、よみ人知らず歌の「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という夏歌が採録されている。「花」に対する捉え方や季節と人事との関連から、このような採録状況である。小野小町の歌に關して言えば、「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」（五五二・恋二）が高等学校では採録され、より明確に「恋」に身を委ねる姿勢である小町の歌を、学ぶようになっている。

次に、教育出版・中学「国語」教科書『伝え合う言葉 中学国語3』では、三省堂と比べ、貫之・敏行の歌は同じく採録され、小町の歌だけが、三省堂が高等学校版で採録していた「思ひつつ」を採録している。歌数は同じく三首で、三省堂・教育出版ともに『古今集』歌は三首の採録である。

三省堂版と同じように、教育出版・高等学校教科書『国語総合 改訂版』において、同社・中学版と比べると、敏行「秋来ぬと」と小町「思ひつつ」が重複しており、春の歌に關しては、遍昭の「浅緑糸繰りかけて白露を珠にも貫ける春の柳か」（春上）が採録

されており、「花」に関する歌は見られない。

双方の中学版を単元全体として見ると、「和歌の世界」(三省堂)では、『万葉』十首・『古今』三首・『新古今』三首となる。『詩歌の味わい』(教育出版)では、『万葉』八首・『古今』三首・『新古今』三首となる。

以上の状況を、『古今集』に限定して、『国歌大観』番号を用いて一覧表にすると次のようになる。

	中学校	高等学校
三省堂	42 春上・貫之 113 (春下・小町) 169 (秋上・敏行)*	2 春上・貫之 53 (春上・業平) 139 (夏・よみ人しらす) 169 (秋上・敏行)* 552 (恋二・小町) 756 (恋五・伊勢) 942 (雑下・よみ人しらす)
教育出版	42 春上・貫之 169 (秋上・敏行)* 552 恋二・小町)*	27 春上・遍昭 139 (夏・よみ人しらす) 169 (秋上・敏行)* 315 (冬・源宗子) 404 離別・貫之 552 恋二・小町)*

(*印は、各出版社において中高の双方の教科書に採録された歌)

この表を一覧して、まず採録歌数だが、中学三首で、高等学校で約倍数の六・七首となっている。採録歌の部立を見ると、中学で双方の出版社とも、春秋歌を収めると同時に小町歌(一・三番歌は「春」の部立であるが、自然詠を背景に暗に人事を詠み込む歌として解釈が可能なことも考え併せて)で「恋」の観念に言及する形を採る。高等学校では、三省堂が「春2・夏1・秋1・恋2雑1」と四季歌で「冬」を採録せず、女流歌人の恋歌二首を採録したところに特徴が見いだせる。教育出版は、「春夏秋冬各1・離別1・恋1」とし、四季歌を揃えたところに特徴を見いだせようか。その割には、一六九番の敏行歌で「立秋」の観念を学ぶことと対照的な「立春」の歌はなく、四季を揃えたところで、その採録各歌の関連から学ぶ内容は断片的で、季節観念を学ぶには至らないと言わざるを得ない。他に採録基準として歌人の問題もあるが、基本的に撰者・貫之の歌は必須であり、六歌仙とよみ人しらすのバランスを考えて採録をしているようである。

高等学校「国語総合」の教科書全体を考えれば、採録歌数にも限界があり、『古今集』のみを偏重するわけにもいかないが、それだけに、中学校教科書との連繋を考えることが不可欠ではないかと考える。前の例で言えば、教育出版の場合に中高で二首の重複があり、高等学校で六首採録のうち三分の一が前年中学で学んでいることになる。当然、一人の学習者が中学校と高等学校で同一出版社の教科書で学ぶというケースが少ないということも想定されるが、それにしても他の多くの高等学校「国語総合」教科書の存在を考えたときに、尚更、中学校で学ぶべき「古典和歌」の

教材価値に、何らかの指標を持たせ、その上に立脚した高等学校教科書の和歌教材採録が望まれるのではないだろうか。

そこで、中学校・高等学校の「和歌教材」を繋ぐ指標として、古典教育で不可欠な「季節観念」を提案したい。例えば、中学校で古典を扱うときに、「月の異名」を取りあげることがあるが、単に「一月」は「睦月」、季節は「春」というのではなく、なぜ「二月」が「春」なのかを学び、その根拠を考えておく必要性があると思うのである。そして、そのことは現在でも新年一月に「迎春」や「新春」と表現される意味を、学ぶことにもなる。

『万葉集』相聞歌に発する「恋」の感情を歌にする日本詩歌の伝統も、「古典和歌」教材の指標として重要であるのは事実だが、「恋」の心情表現にも「四季」による表現が関連することから逃れられない「古典和歌」においては、「季節観念」を学ぶことが、古典教育として大きな意味を持つことになるはずである。

四、『古今集』——詞華集としての「季節観念」享受

『古今集』が表現した「季節観念」は、個々の和歌により支えられつつも、詞華集として和歌の部立・配列を有機的なものとしたことにより成り立っている。このことは、これまで先学の多くの研究により明らかにされている。個々の和歌が制作された事情はさることながら、撰者が和歌を配列する際に何らかの指標を以て、四季のうつろいを和歌を配列していくことで表現しているということである。これは、『古今集』研究では、常識的なことであるが、ひとたび教科書教材の採録という意味では、あまり意識

されていないと言わざるを得ない。ただ、前項で提示したように、中学校・高等学校に共通する教材として、『古今集』秋上の巻頭歌一六九番・藤原敏行「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にそおどろかれぬる」が重視されていることは、学習における一つの契機となると考えられる。

『古今集』の季節観念という点に「三元的四季観」があると考えたのは、田中新一氏³である。集としての配列から「節月」と「暦月」が双方見られることを詳細に分析した研究である。端的に述べれば、「人間が定めた季節」が「節月」であり、「人間が定めた時間」が「暦月」である。これが「四季歌」の配列では、「節月」で始まり「暦月」で終わるという構造になっているというわけである。田中氏の研究以後も、こうした勅撰集としての構造自体に、「王権の自然支配」という意味合いを認めようとする研究も進められ、『古今集』という勅撰集の根源的な存在理由であるという見解と考えるべきであろう。

その「節月」と「暦月」意識は、教材として古典教育の大きな指標となると考えられるのである。現代に於ける学習者の生活感を考えると、「季節観念」の薄れは顕著であるが、そうであつても、「暦月」を基準としながらも、「立春」といった「節月」についても気象情報に関連して意識されることは少なくない。そこで、こうした「四季観」が顕著な教材を基準にし、類歌や、学習状況に応じた同発想の漢詩文を参考資料として引用することで、どのような「古典和歌」教材の展開があるかを具体的に提示してみることとする。

正岡子規の酷評により、「くだらぬ集」とされた原因ともなった『古今集』巻頭歌を含めて、巻頭巻末の意味が理解できる参考資料を併せて提示することで、教材とされることの多い歌との関連を探ってみよう。

《教材》

春立ちける日よめる

紀 貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

《参考資料―漢詩文》

『礼記・月令』「孟春之月……東風解氷」

『白氏文集』府西池

柳無氣力枝先動

柳 氣力無くして 枝先つ動き

池有波文氷尽開

池に波文有りて 氷尽き開く

今日不知誰計会

今日知らず 誰か計会せし

春風春水一時来

春風春水 一時に来る

《参考資料―類歌と背景の漢詩文》

ふる年に春立ちける日よめる

在原元方

年のうちに春は来にけりひとせを去年とやいはむ今年とやいはむ

『菅家文草』卷四（二七八）

立春

在十二月二十六日

偏因曆注覺春來 偏に曆の注するに因りて春の来るを覺ゆ

物色人心尚冷灰 物色と人心と尚冷しき灰のごとくなるを

誣告浪従水下動 誣ひて告ぐるは浪の水の下より動かむことを

暗思花在雪中開 暗かに思ふは花の雪の中に在りて開かむこと

を

浮雲自後寒心暖 浮雲は自後寒くとも夜に暖ならむ

壯日如今去不廻 壮なる日は 如今 去にて廻らざらむ

消息窮通皆有運 消息窮通 皆運有り

莫言墮戸不驚雷 言ふことなかれ 戸を墮りて雷に驚かずと

《参考資料―卷末対照歌と背景の漢詩文》

弥生のつこもりの日、雨の降りけるに、藤の花を折りて人

につかはしける

業平朝臣

濡れつつぞしひて折りつる年の内に春はいくかもあらじと思へ

ば

『白氏文集』三月三十日題慈恩寺

慈恩春色今朝尽

慈恩の春色 今朝尽く

尽日徘徊倚寺門

尽日 徘徊し寺門に倚る

惆悵春帰留不得

惆悵として春帰りに留むるを得ず

紫藤花下漸黄昏

紫藤 花下 漸く黄昏

ここに挙げたのは三首の和歌とその背景となる漢詩文であるが、春巻頭の二首のなかで、特に「袖ひちて」の貫之歌は、前項で示したように中学高校で重複して教材化されることが多い。この歌の背景として示した白居易の「府西池」は、田中幹子氏により詳細に検討された研究成果である。季節の到来が「一回的に截然と」訪れる和歌の特徴は、こうした白居易詩文の影響が大きいという論である。特にこの貫之歌は、「袖ひちてむすびし水」の部分が、昨夏への時間的な回想を想起させつつ、冬の間その「水のこほれる」状態だったのを、「春立つけふの風やとくらむ」と、

立春のまさにこの日に「解氷」するのだという、季節における時間的空間的な拡大を一首の中に取り込んだ名歌である。

既に教科書採録の多いこの貫之歌を教材として扱うとしよう。その際に「一首の和歌のみの情報で解釈・鑑賞するのは、あまりにも歌の背景を無視したものとならざるを得ない。」「春」の到来が一回的に「解氷」により可視化されることは、まさに形象された自然現象を目に視える形に切り取ったことになるが、そこで参考資料として漢詩文の発想を読み取ることを併せて考えておくべきであろう。また「立春」という「節月」の到来が、平安朝ではどのように意識されていたかを知ること重要である。巻頭歌に詠まれた「年内立春」の「戸惑い」は、「暦月」と「節月」の差から生じたものであり、現代においても「暦の上では春だ。」といった表現として、その時々体感的な気候との差が意識される。今現在における季節がいつであるのかという、単純かつ不可解な疑問は、時代を超えた素朴な問題意識として共有できるものではないか。「屁理屈」とされた「年内立春」という巻頭歌の問題意識は、実は古典を学ぶ根本的な問題である「季節観念」の共有、という大きなテーマに迫るものであるといつてよいだろう。

「節月」で始まった巻頭歌が、対照歌として挙げた巻末では「暦月」において終息していくのは、やはり白居易詩文の影響であることは、前の田中氏の論文で指摘されたことである。このことは、「弥生」「三月」が「春」で、「卯月」「四月」が「夏」である、月の異名を古典常識として提示する際の、具体例として有効に働くことになろう。併せてその理解を促進する歌として、

夏巻頭・巻末一首（卷三）

題しらず

よみ人しらず

わが屋戸の池の藤波咲きにけり山郭公いつか来鳴かむ

六月のつごもりの日よめる

みつね

夏と秋と行きかふ空のかよひちはかたへすずしき風や吹くらむなどの春巻末でも意識されていた「藤波」という景物から「郭公」への移行を詠んだ歌や、夏から秋の「涼風」への移行は、季節観念を考える上で参考資料として有効である。次にこれも教材化されることの多い秋巻頭歌。

《教材》

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋来ぬと目にはさやかに見えねどもかぜの音にぞおどろかれぬる

《参考資料―漢詩文》

『礼記・月令』「孟秋之月……涼風至」

《参考資料―類歌と背景の漢詩文》

秋立つ日、うへのをのことも、賀茂の河原に川道遙しける、

ともにまかりてよめる

つらゆき

川風の涼しくもあるか打ちよする波とともにや秋や立つらむ

『白氏文集』「立秋日登樂遊園」

独行独語曲江頭 独り行き独り語る曲江の頭

廻馬遲遲上樂遊 馬を廻らし遲遲として樂遊に上る

蕭颯涼風与衰鬢 蕭颯たり涼風と衰鬢と

誰教計会一時秋 誰か計会して一時に秋ならしむる

「秋風引」劉禹錫

何処秋風至

何の処にか秋風至る

蕭蕭送雁群

蕭蕭として雁群を送る

朝來入庭樹

朝來りて庭樹に入る

孤客最先聞

孤客 最も先に聞く

秋の到来は「涼風至」で知覚されるのは、『白氏文集』や劉禹錫の詩を見れば理解できるが、藤原敏行の秋巻頭歌で、視覚的には捉えられない「秋の到来」を聴覚で捉え「おどろかれぬる」としたのは、『古今集』の季節觀念の代表的な要素と言うことができるだろう。この歌は、前項でも指摘したように、中学高校の教科書とともに教材化されている場合が多い。一首のみの優れた「季節の到来」を捉えた歌であると鑑賞するよりも、集の配列構造の中でこそ、その存在価値が発揮される歌であるということを含めて、教材と考える方向が望ましいのではないだろうか。「季節の推移」の視覚化にあたり導入された「屁理屈」は、平安時代人の屈折した心象風景から生み出されたものではなく、和漢比較的な漢詩文と和歌の表現・発想の交流があつてこそ達成された成果であることを、学習の背景に据えておくべきではないかと思うのである。

和歌教材は、単発的であり一首一首の解釈と鑑賞を施していく授業方法に終始してしまうと、テーマ性や歌風という点に言及しても荒唐無稽なものとならざるを得ない。「万葉・古今・新古今」を「素朴・理知・幽玄」と評していくことを理解するためには、「季節のうつろい」をテーマにして、その表現の深層を探る類歌

や背景となる漢詩文を併せて参考資料として提供していくという、教材補充や授業方法が望まれることになるだろう。そして『万葉』を始原とする、それ以後の平安朝和歌史において、「季節觀念」という規範が『古今』により確立し、多くの物語・日記・説話文学への影響を経て、『新古今』に至るということを視野に入れた学習が必要となるだろう。

現代人の生活に於いて、古典的要素は忘れられていることが多くなったとも考えられるが、日常的な生活を取り巻く気象を受け入れることは、どの時代も変わらぬ心理であり、普遍的な觀念と考えることができよう。本来、目に見えない自然の摂理をどのように捉えて言語表現するかという営みが、「古典和歌」に結実していることを、学習の根本的な理念として見据えておくことが不可欠である。同時に、漢詩文との交流が和歌に与えた影響も考え、漢詩文で表現された要素も併せて鑑賞することで、広くアジアの漢字文化圏に拡がる視野を学ぶことも可能になるだろう。古典を学ぶ現代的な意味とは、やはり原点に回歸しその研究成果に基づく訓詁注釈から得られたものを、学習者に理解しやすくし、教材化していくべきであると考えるのである。

五、結語——古典教育の目的再考——

これまで主として中学校・高等学校の古典教育に於いて、「和歌」の教材価値や背景となる類歌・漢詩文の参考資料提示の視点を考察してきた。その根底には、韻文と散文という文学形式の相違による教材としての価値観や、それに伴う偏向が生み出されて

くる問題を垣間見たわけである。するとそこには、古典教育自体がその本質を忘却し、教育現場に於いて、学習者側が「文法を覚え込むこと」や「現代語訳を筆写し暗記する」という、狭窄的な視野による学習活動に終始するものに貶められているという現状が存在しているように思う。そのような学習活動こそが、「古文読解力を身に付けるために効果的である」という間違った幻想の中で、実行されてしまうことが多いように見受けられる。

古典教育の本質論をここで考えるのは、紙幅の関係で十分ではないが、少なくとも「文法的な知識の獲得」のみや「現代語訳の暗記」から脱して、学習者自身の現在に於ける問題意識から始発し、生活や文化の背景を考えることに、その目的があると考える。その目的として「季節觀念の享受」を取り上げることには、大きな意義があると考えられる。何より日本で生活することの「今」を「古典教材」で考えることに他ならないからである。

また、中学校・高等学校の教材における連繫も、今後、より精巧に考えられていくべき課題であろう。学校制度を始めとする教育改革の流れの中で、学ぶ対象となる教材自体が魅力的なものであることは、非常に重要な要素であるだろう。そこに単純な重複や目的を見失った教材の提供で、「古典」そのものの魅力を半減させるような状況は避けねばなるまい。

日本初の勅撰和歌集である『古今集』が提示している、以後の和歌史で規範的な「季節觀念」を学習し享受することで、新しい視野が獲得できる可能性があるのではないかと思う。「季節觀念の享受」は、単に古典教育のみの問題ではなく、日本文化そのもの

のを考える際の、大きな一指標となるべき普遍性を持つていると考えるからである。

注

- (1) 丸谷才一氏『日本文学史中卓わかり』（一九七八年 講談社）後に「講談社文庫」（一九八四年）に所載。
- (2) 松田武夫氏の『古今集の構造に関する研究』（一九六五年 風間書房）に代表される、集としての和歌配列を読むことで、撰者の構築した「季節觀念」や「恋の進行」を読み取ろうとする研究成果。
- (3) 田中新一氏『平安朝文学に見る二元的四季觀』（一九九〇年 風間書房）
- (4) 渡辺秀夫氏『歌のちから』天地・鬼神を動かすもの——「礼楽」と「歌」——（『國語と國文学』二〇〇二年五月）
- 滝川幸司氏『古今和歌集の勅撰性について——一番貫之歌の位置をめぐって——』（『和歌文学研究』第七十号）一九九五年六月
- (5) 田中幹子氏『古今集』における季の到来と辞去について（『中古文学』一九九七年三月 創立三十周年記念臨時増刊号）
- (6) 小論「和漢比較教材の有用性」（早稲田大学大学院教育学研究科紀要）別冊十三号 一 二〇〇五年九月

（山崎学園富士見中学高等学校）